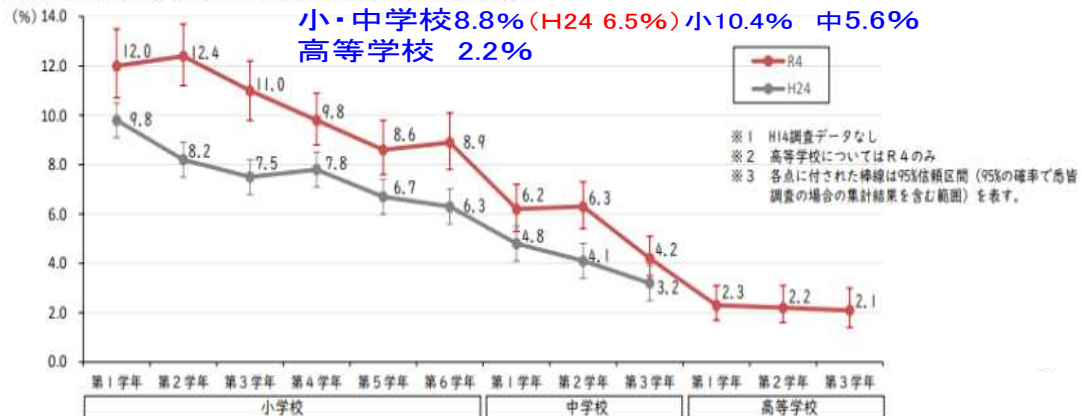


「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「発達障害は増えているの?」

＜「学習面又は行動面で著しい困難を示す」とされた児童生徒の学年別の推移＞



令和4年12月、通常の学級に在籍する小・中学生で、知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面で著しい困難を示す児童生徒の割合が8.8%と発表された。直近10年間で義務教育段階での児童生徒数は1割減少する一方で、平成14年の調査では6.3%、平成24年の調査では6.5%と、調査をする度に特別な配慮を必要とする児童生徒数は増えている。

通信No.59では、学年が上がるにつれて割合が低くなる理由を紹介したが、今回は学習面又は行動面で困難さを示す子どもが増えている背景を探る。

【増えている理由（私見）】

- 1 発達障害への理解が進み、保護者や教師の気づきができるようになった。
- 2 発達障害を診断できる医師が増えた。
- 3 家庭環境の複雑さや養育環境の弱さから、発達障害と似たような行動を示す愛着障害と思われる子どもが増えている。（貧困家庭、虐待、ネグレクトの増加）
- 4 核家族化が進んで気軽に相談できる人がいないため、子育てに悩む保護者のイライラや心配が子どもの不安な状態を引き起こしている。
- 5 保護者自身が発達障害のため、我が子の困りごとに気付かず、二次障害を起こしている。
- 6 周囲の子どもが支援対象児とうまく関わる社会性が育っていない、園や学校では集団からはみ出す子どもを包み込む余裕がないことから目立つようになった。

発達障害の子どもが増えたという見方もできるが、社会の変化に伴い、似たような特性のある子どもが増えてきた、あるいは、目立つようになったのではないかと思います。

特別な支援が必要な子どもには、本人に働きかけて困りごとを改善するとともに、周囲の子どもの障害理解の促進と社会性の育成、合理的配慮を含む環境調整、保護者の心情に寄り添った相談、関係機関と連携した支援も大切になります。



とれたて直送便



「子どものせいにしない！」

ある園で子どもが外遊びをしていたとき、野菜の苗が入ったケースに足を引っかけて転びそうになった。「ちゃんと前を見てないからぶつかったんだよ」と注意を与えろと思いきや、「大丈夫でよかった。ここにケースを置いた先生が悪かったね。ごめんなさい」と言葉を掛けた。子どもへの深い愛情と優しいまなざしが、温もりのある言葉となって表れると感じた。うまくいかないと、すぐ子どものせいにしてしまう自分を恥じた。